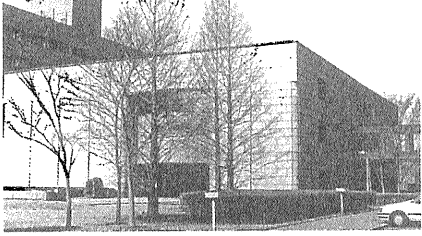


地質標本館だより



No. 43

宇宙からの訪館者

すでに本誌その他で広く報じられたように、1996年は1月7日に降った「つくば隕石」でその幕を開けました。

晴天の日曜日の午後だったことで、隕石落下の様子は広く目撃され、その日のうちに早くも降下隕石の一部が確認されました。その後、当館が中心となっていち早く配布した「手配書」の効果もあって、隕石発見の情報が連日相次ぎ、月末までに22の降下箇所が明らかになりました。

この間、報道関係の取材活動もすさまじく、「今何個ですか」といった現状問い合わせの電話が一時はひっきりなしでした。写真1は当館内で行われた取材の様子です。

「96年のお年玉」と呼ばれて新年の話題をさらったつくば隕石も、やがてその座を百武彗星に譲り、隕石探しも急速に下火になって行きました。

つくば市上空で破裂飛散した隕石のうち、これまでに発見・回収された全ての個体(一部レプリカ、23箇所、総量約800g)は、科学技術週間の特別展示として、ひととき当館に顔を揃えました(本欄前号参照)。今は発見者の手に帰っていますが、極く一部が発見者のご好意により現在も当館に展示されています。(遠藤祐二)

普及活動

学園都市の自然と親しむ会が主催する地学セミナー「宝石鉱物の世界」が1月27日に地質標本館で



写真1 村山定男氏(国立科博, 右端)の説明を取材する報道陣

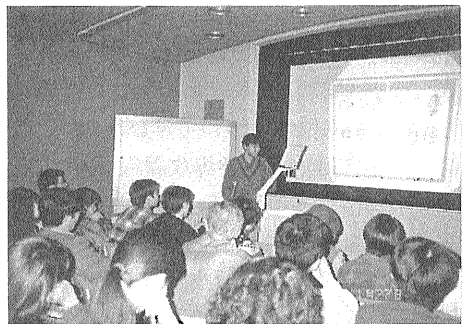


写真2 地学セミナーでの講演風景

開催され、同館の坂野技官が講演を行いました。

このセミナーでは、宝石鉱物が放つ美しさ、具体的にはオパールの遊色、キャッツアイなどに出現するシャトヤンシー、ルビーやサファイアなどにみられるアステリズムは、光の物理的な現象(回折、干渉、散乱)であることが解説され、また茨城県内の宝石産地として、ガーネットで有名な真壁郡真壁町の尾と、ピンク色や青緑色のトルマリンが採集できる久慈郡里美村妙見山の両産地が紹介されました(写真2)。78名の参加者は子供から大人まで幅広い年齢層の人々で、通常の講演に比べて女性が目立ちました。やはり女性の宝石に対する関心は高いようです。質問は山の尾や妙見山への行き方が最も多く、「宝石鉱物」を自分自身で採集してみたいと考えている人は比較的多いようです。

(坂野靖行)

地質標本館は、10月から第2・第4土曜日も開館します。